

## 京都芸術教育研究事業の取り組み

### 京都芸術大学と北白川小学校の連携授業について

#### 主旨

京都芸術大学と北白川小学校は、美術教育の根幹を**対話教育**と**鑑賞教育**に絞り、連携授業を実施しています。

一般的に「芸術」と聞くと、選ばれた人だけが持つ特別な才能のように感じられることがあります。しかし、私たちが考える芸術とは、身の回りの世界をよく見て、疑問を抱き、感じたことを言語化し、他者に伝える方法を考える、そんな日常の中で誰もが自然に行う「あたりまえ」の行為と捉えています。

この連携授業では、プロの絵描きを育成したり技術の向上を目的とするのではなく、人として生きる上で不可欠な**想像力**を養い、豊かな人間関係を築くことを目指しています。

#### 連携授業の流れ

##### ① 授業計画

京都芸術大学キャラクターデザイン学科の村上聡教授と、北白川小学校の山田七夕教諭とで数回打ち合わせを行い、まずは学びの着地点を定めます。そして大学の**対話教育のノウハウ**を取り入れながら詳細の授業計画を練り込み、幾度かシミュレーションを行います。

##### ② 授業運営

山田教諭による授業を実施。ここに多くの教員が参加して児童の**思考プロセス**や**表情の変化**を観察します。

##### ③ フィードバックとレクチャー

授業終了後、参加した教員全員でのフィードバック会を行います。ここで村上教授が**対話教育**や**ゲーミフィケーション**について講義を行い、能動性を高めるための仕組みや観察力を高めるための方法を学び、その知識や技術をどのように授業に活用できるかをディスカッションします。





## 連携の成果

この授業では、毎年異なる題材でワークショップを実施しています。

対話型鑑賞を行う年もあれば、平面作品や立体作品の制作、音を用いたワークショップなど、多彩な表現方法を取り入れて授業を展開します。

しかし、重要なのは児童が制作する作品そのものではありません。この授業の本質的な目的は、児童自身が得た**気づきや発見、喜び**であり、さらには**教員がその変化に気付く**ことです。

この連携授業を通じて、**観察・対話・言語化**の重要性を再認識し、それらがいかに日常に根付いた「あたりまえ」の行為であるかを改めて理解することを目指しています。